巨大草食恐竜ラペトサウルスの小さな体が語ること

ティタノサウルス類あるいはティタノサウリアと呼ばれる恐竜は、地球史上最大の草食恐竜のなかまである。ブラキオサウルス科といっしょにしてティタノサウルス形類(Titanosauriformis)と呼ばれることもある。マダガスカルでは白亜紀後期の地層から、この分類群の一種であるラペトサウルス・クラウセイ(*Rapetosaurus krausei*)が知られている。カーリー・ロジャースら古生物学者は、マダガスカルで発見されたこの巨大恐竜に属し、体重がたった 40 キロしかない化石を記載した[1]。この恐竜は孵化したときの体重がたった 3.4 キロであったが、数週間で、体重 40 キロ、腰の高さが 35 センチにまで成長したという。そして、洪水で流されて地層中に埋没して短い生涯を閉じた。

ロジャーらは、この化石の骨格や形態を詳しく調べ、運動機能が成体とほとんど同じであると結論した。このことは、ラペトサウルスが生まれてすぐ、自分で動き、自分で餌をみつけて食べていたことを示唆しており、親が子育てにほとんど関わっていなかったことを意味している。同じ時代に生きた獣脚類や鳥盤目の恐竜では、親の子育てが重要な役割を果たしていたことが注目されているが、レパトサウルスの子どもは、生まれてすぐに一人前の生活をしなければならかったようだ。

[1] Rogers, K. C. et al. (2016) Science, 352, 450-453.